

氏名	長谷川 大悟		
学位の種類	博士（ヒューマン・ケア科学）		
学位記番号	博甲第	8658	号
学位授与年月	平成	30年	3月 23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	介護老人保健施設における転倒発生状況と危険予知 トレーニングを用いた介入効果に関する研究		
主査	筑波大学教授	博士(ヒューマン・ケア科学)	松田ひとみ
副査	筑波大学准教授	博士(学術)	水野智美
副査	筑波大学准教授	医学博士	柳 久子
副査	筑波大学准教授	博士(医学)	羽田康司

## 論文の内容の要旨

長谷川大吾氏の博士學位論文は、介護老人保健施設入所者における転倒発生状況の実態と予防のために施設職員へのトレーニングの効果を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

### 【研究1】

長谷川氏は介護老人保健施設入所者における転倒発生状況を移動手段別に明らかにすることを目的としている。

#### (方法)

著者は2013年4月1日から2014年3月31日で発生した転倒を含む事故を記録した事故報告書や診療録などを分析対象として、入所者の年齢、性別、要介護度などの基本情報や入所者の転倒回数、時間、場所などについての情報と車椅子使用者（部分介助者）において、転倒リスク要因を検討している。

#### (分析方法)

著者は移動手段別に「転倒発生率」を算出し、記述統計および車椅子使用者（部分介助者）では転倒の有無を従属変数とし、多変量解析(ロジスティック回帰分析)を用いて分析している。

#### (結果)

施設入所者数341名のうち、転倒者は154名(45.2%)であった。移動手段別にみると、車椅子使用者を全介助と部分介助に分け、さらに歩行移動者の転倒率をみると、順に18.8%、56.5%、42.6%であり、時間帯ではいずれも午後2時から4時であることを明らかにすることができた。また、転倒発生率の最も高かった車椅子使用者（部分介助者）の転倒リスク要因では、年齢、要介護度、薬剤服用数に有意差が認められ、オッズ比はそれぞれ1.85、2.56、2.88であり、これらは転倒予防のために有用な要因であると捉えられる。

## 【研究 2-1】

著者は、介護老人保健施設の職員に対し危険予知トレーニング（KYT）を実施し、職員の安全意識への効果を検証することを目的としている。

(対象と方法)

全職員 51 名（非常勤を含む）に、2016 年 7 月 25 日から同 30 日の間、著者自身が施設内で KYT を 1 日 1 回 60 分間実施し、1 回以上 KYT の受講 1 ヶ月前、1 ヶ月後、3 ヶ月後に安全意識に関する自記式質問紙調査を行っている。統計学的解析では、反復測定一元配置分散分析を用いている。

(結果)

51 名中 29 名がトレーニングと 3 回の調査に参加したが、「総合スコア」と下位尺度の「自己意識」に有意差を認めている。医療職において「自己意識」が有意に向上している結果を得ている。著者は総合スコアについて、ディスカッション形式により他者の考え方や知識の共有が図りながら KYT を実施したことが、安全に対する気付きや考え方を再確認するきっかけとなり、組織全体として安全意識が向上したとしている。

## 【研究 2-2】

(対象と方法)

2016 年 5 月から 10 月および 2015 年 5 月から 10 月の期間に入所していた A 介護老人保健施設入所者（ショートステイ含む）の事故報告書や介護記録などから、転倒発生状況（入所者数、総人日、全事故件数など）の調査と職員への聞き取りを行い、記述統計を用いて分析している。

(結果)

転倒発生状況において、KYT 実施前後および昨年同時期で大きな変化は見られなかった。

(総合考察・結論)

著者は老健施設では、高頻度に転倒が発生しており、特に車椅子使用者（部分介助者）に着目することで、施設全体の転倒発生率も減少する可能性に言及することができた。また施設職員に対する 1 クールのみでの KYT では、転倒予防への効果は低いことを導きだした。今後、KYT 方法の見直しや新たなトレーニング方法の開発などを課題とすることができた。特に介護現場では、人員不足ゆえに多忙な業務に追われていることが問題視されており、教育研修に多くの時間を割くことが困難な場合があるが、著者は KYT が少人数かつ短時間で行えることから、現場に則した現実的なトレーニングであると指摘している。

今回、職員の安全に対する意識を向上させる可能性が示唆されている。一方、1 クールのみでの KYT では、入所者の転倒予防への効果は低いことが示されたが KYT の一連の過程を通じて多職種協働による共通理解の基でケアが実現できたとするならば、入所者のさらなる安全が図れる可能性があるとしている。

## 審査の結果の要旨

(批評)

長谷川氏は高齢者の転倒予防の意義を捉え、施設内の事故の実態を捉えその予防策としてのトレーニングを行うことができた。事故の実態は施設内での秘匿性も高いため、貴重なデータと考えられる。またトレーニング方法については、企業などで用いられ信頼性が確保されているが、医療福祉現場での活用方法の提案としても有意義であり、今後に向けての課題を見出すことができた。本研究は高齢者の転倒予防の具体策であり、介護施設の職員にとっては教育方法を改善するために有用な取り組みであると考えられた。

平成 30 年 1 月 5 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。